

やまなみ五湖賞

水への一步は一冊の本から

きっかけは、ある本でした。小学三年生の時、読書感想画で読む本を決めるために父と本屋さんに行き、そこで、ある本を手に取りました。その本は題名に「プリンセス」が入っていて、甕を持った女の子のイラストが印象的でした。その本をきっかけに、「水が日常的に飲めない人がいる」という事を私は初めて知りました。

私たちは様々なところで水を使っています。飲み水だけでなく、お風呂や料理、洗濯など、清潔な水が蛇口をひねればいつでも手に入ります。でもこれらは「当たり前」ではないのです。私が読んだその本は、モデル活動をしている方の小さい頃の経験談に基づいて書かれたものでした。そこには、日が昇る前から大きな甕を頭の上に乗せ、一日かけてお母さんと水を汲みに行く女の子の日常が描かれています。けれど大変な思いをしてやつとの思いで調達した水も、飲むようなものではない泥水。そんな事が、私の住む地球上で起きているとは信じられませんでした。

その後、私は父と宮ヶ瀬ダムに行きました。最初は遠出することに乗り気ではありませんでしたが、向かって待ち構えていたのは、大きなダム。私が今まで使っていた水は、こんなに大きな施設を通して来ているのか、と驚嘆しました。

そこで私は、ダムについて調べました。ダムは、川の流れをせき止めて貯める巨大な構造物です。ではなぜ、自然を流れている水が、清潔な水になって届くのでしょうか。そこで知ったのが「浄水場」の存在です。浄水場では、どのような過程を経るのでしょうか。浄水場では、川から取り込んだ水に薬品を入れて汚れを固め、沈殿・砂の層でろ過し、塩素で消毒して飲み水にしています。特に汚れがひどい場合は、「高度浄水処理」という特別な方法でより安心・安全な水にして各家庭に届けてくれます。日本では、この工程を毎日全国で行っているから、安心・安全な水を使う事ができるのです。さらに私たちの住む横浜市は、特に水質に

横浜市立篠原中学校 一年 五十嵐 栞

厳しく、問題がないかチェックされた水が水道管を通って、各家庭に届きます。

でも、この私たちにとつての当たり前は、世界では通用しません。水道水を飲む国は、日本を含め十数カ国と言われています。私が出会った本のように、長い時間をかけても綺麗な水が手に入らない地域もあるのです。国際的に安全な水を使用できない人は、四人に一人。そして、不衛生な水が原因で毎日六千人の子供たちが亡くなっている現実には、胸が締め付けられます。

この痛ましい現実には、何ができるでしょう。私が考えたことは二つです。一つ目は募金です。募金は私たちがよく行くコンビニや、ネットを通じて、少額からでも支援できます。少しの積み重ねで安心・安全な水を届ける事ができます。二つ目は、この現状を正しく学んで、より多くの人に広める事です。この現状を正しく理解している人は、そう多くはないのではないのでしょうか。私もあの本に出会わなければ、「水は使えることが当たり前」と思い込んでいたはず。現状を知り、深く考える事が、これから先の未来を変える事に繋がると、私は思います。

皆さんは、SDGsを知っていますか。二〇三〇年までに、持続可能でより良い世界を目指す、十七の目標のことです。「安全な水とトイレを世界中に」。こんな目標があります。私は残りの四年間で、少しでも多くの方が安心・安全な水を手に入れられる世界を作りたいです。私一人ができる事は小さな事です。世界中の人々が現状を知り、少しずつ行動に移す事で、救える命がいくつもあります。皆さんも、私と一緒にその一步を踏み出しませんか。